

（株）高齢社のビジネスモデルを参考に 定年後のシニアが活躍する場を広げる

株式会社シニア東海^{とうかい}

——本事例のポイント——

- シニア派遣の先駆者・（株）高齢社のビジネスモデルを参考に、愛知県を中心とした東海地区における60歳以上の人材の就労をサポート
- 地元の製造業の期待に応え、高いスキルを身につけた人材を即戦力として派遣
- シニアの生活パターンに合わせたフレキシブルな就労が可能

役社長）は、高い就業意欲と社会参加志向を持っている「60歳以上のシニア世代」に特化した人材派遣会社である。

「シニア世代のための人材派遣会社ですから、年齢の高い人でも迷わずに来社していただけるように、できるだけわかりやすい場所に事務所を置くのがよいだろうと、当地に本社を置きました。おかげさまで好評のようです」と高江洲社長はシニア世代に対する配慮のひとつを説明する。

同社の設立は2011（平成23）年4月。創業の経緯に関しては、シニア派遣の先駆者・株式会社高齢社の上田研二氏との出会いに触れないわけにはいかないだろう。

大手技術系人材派遣会社の役員を務め、その関連会社の社長なども歴任してきた高江洲社長は、ある時、上田氏がテレビ東京系列の情報番組「カンブリア宮殿」に出演しているのを見た。

「会社の仕事自体は順調で、あえて転進する理由もありませんでした。しかし、少子高齢化が進んでいることを実感していましたし、バブル崩壊やリーマン・ショックの際の対応で数々の辛酸をなめたこともあり、番組で紹介されていた『働く人を大切にしよう』という上田さんが掲げる企業理念に共感する部分も多くありました。そこで、すぐに上田さんに連絡を取って面会したのです」と高江洲社長は創業を決意した発端を語る。

「（株）高齢社のビジネスモデルを東海地区で展開したい」という高江洲社長の熱い思いを聞いた上田さんは、快く同社のビジネスモデルをあますことなく提供し、さらには（株）高齢社がシニア東海に出資するという形で資本業務提携を行うことになった。

そして高江洲社長は、（株）高齢社の企業理念を含め、同社の豊富な実績に裏打ちされたノ

創業のきっかけは（株）高齢社との出会い

JR東海道本線と中央本線、そして名鉄線^{めいせつ}が乗り入れる金山総合駅^{かなみやま}の南口から徒歩1分という交通至便の場所に本社を置く「株式会社シニア東海」（愛知県名古屋市長古屋市、高江洲晋代^{たかえすま}代表取締役



高江洲晋・代表取締役社長

ウハウをベースにしながら、(株)シニア東海独自のビジネスモデルの創造にも力を入れた。「東京ガスOBの上田さんが東京ガスから受託する仕事をベースとしたように、当社では『モノづくり』企業が大きな位置を占める東海地区の特性を生かそうと考えました。高い技術を生につけていながら、働く場を見つけられずにいる60歳以上の退職者に限定した人材派遣を行うことにしたのです」と高江洲社長。

製造業を中心とした技術系の分野に特化した高江洲社長のもくろみは、東海地区の労働市場のニーズにあてはまり、同社の業績は順調に伸び、現在に至っている。

シニア派遣の必要性

同社の派遣スタッフの平均年齢は63歳、最高年齢は72歳。同社が手がけているおもな産業分野としては、「工業・産業用機械」「工作機械・搬送機械、食品製造機械など」、「輸送用機械・製品(自動車、自動車用部品など)」、「業務用製品(プラスチック製品、樹脂製品など)」などがあり、20年から30年以上の経験を積んだ登録スタッフの技量は、本稿後半の事例からもわかるとおり、派遣先から高く評価されている。しかも、同社の派遣スタッフは、自ら現場作業に従事するばかりではなく、中小企業では若手従業員を指導する教育係を頼まれることも珍しくないという。このため同社への人材派遣の要請は引きも切らないのが現状だ。

こうした現状に、高江洲社長は、「高齢の技術者が派遣先で生き活きと働く姿に手応えを感じています。また、シニア世代はよい意味で『わがまま』ですから、そのライフスタイルに合わせるために、フルタイム勤務ばかりではなく、短時間や短日数の勤務を選択できるようにしました。時間や収入がさがられることもありうる『派遣』という働き方は、60歳以上の高齢者にこそ適しているのではないのでしょうか」と力を込める。

では、同社で就労の場を見出そうとしているシニアの意識はどのようなものなのか。同社では、登録を希望するシニアとの面接の際に「面接シート」を使った調査を行っている。質問項目は、「経験がある職種」、「希望出勤日(曜日)」、「1週あたりの(希望)出勤日数」、「希望勤務時間」、「健康状態」など。このうち「働く理由」に対する回答は以下のとおりとなっている。

1. 生計を立てるため 436人
2. 健康によいから 195人
3. 社会への参加 180人
4. 生きがいを求めて 150人
5. 体力に自信があるから 120人
6. 小遣いを稼ぐため 60人
7. その他 15人

この質問は複数回答であり、回答者の総数が556人であることからすると、8割近い人が「生計を立てるため」に同社に登録していることがわかる。

こうした現状について、「意欲と能力のある高齢者でも、ハローワークで仕事を探しても、なかなか仕事が見つからないのが現状ではないでしょうか。60歳を過ぎてから正社員になりたい人ばかりではないことを考慮しますと、シニア世代の働き方のひとつとして派遣労働は重要な選択肢であるはずですよ」と高江洲社長は語る。

派遣法改正を追い風に、さらなる飛躍を期す

さきの通常国会に提出されていた労働者派遣法の改正案が昨年9月11日に衆議院本会議で可決・成立し、9月30日に施行された。

今回の派遣法改正のおもな内容としては、

- ① 特定労働者派遣事業の廃止
- ② 派遣可能期間を業務ごとに設定する仕組みを廃止し、一部の労働者派遣を除き、派遣先の実業所その他派遣就業の場所ごとに派遣可能期間の上限を3年に設定する
- ③ 派遣元事業主は、同一の組織単位(いわゆる「課」などを想定)ごとの業務について、3年を超える期間継続して同一の派遣労働者に係る労働者派遣を行ってはならないこととする

などがあるが、いわゆる「期間制限のルール」に関しては、「60歳以上の派遣労働者」は例外としてその対象外となっている。

今回の労働者派遣法の改正について、高江洲社長は「60歳以上の派遣労働者に関していえば、以前は派遣期間の最長とされていた3年が経過した後に、改めて新たな派遣先を獲得するということが現実的には非常に困難であるという問題をもたらしていました。60歳で派遣労働

者となったシニアが、63歳で仕事を失うことになりかねなかったからです。こうした意味で、今回の派遣法改正は私どものような企業にとって、『シニアのためにより安定した就労の場を確保することにつながる』という意味で、追い風となることを期待しています。こうしたタイミングをとらえて、これまで以上にシニアの方々が活躍できる機会を増やしていけるように努めてまいります」と、高江洲社長は決意を口にした。

上田研二氏は、「(株)高齢社のビジネスモデルを全国に広めたい。そのためにはすべてのノウハウを提供する」とかねてから公言してきたが、(株)シニア東海の取組みはその成功例のひとつといえるだろう。

(株)シニア東海からの派遣で働くシニアの声

今回の取材では、派遣先企業にご協力いただき、(株)シニア東海からの派遣によって就労しているシニア社員の声を聞く機会を設けていただいた。派遣先企業は、「株式会社三ツ輪機械製作所」(宇佐美代表取締役)。同社は東邦ガス関連の仕事を多く手がけ、名古屋市熱田区に本社工場を構えている。設立は1929(昭和14)年7月。その後、1944年に東邦



(株)シニア東海には、派遣社員をフォローするスタッフにもシニア世代が多い

ガスの指定工場となり、ガス発生用設備機械の製造を始め、現在にいたるまで都市ガス関連の機器や部品の製造を行っている。

(株)シニア東海からの派遣により就労しているシニア社員は赤津光伸さん(63歳)。赤津さんは、同社の社員と同様に、毎日8時30分から17時15分までフルタイムで勤務している。担当しているのはNC旋盤を使った機械加工で、プログラミングも含めた機械のオペレーションが赤津さんの役割だ。取材当日、赤津さんは鋳物製の都市ガス用マンホールのふたの旋盤加工

に取り組んでいた(15頁写真上)。

赤津さんの経歴はユニークで、45歳でサラリーマン生活に別れを告げ、一念発起して民間人から登用される学校の校長になるための勉強に取り組んだ。努力のかけがあり、めでたく試験にも合格し校長としての配属先も決まったが、「民間出身の校長が現場でたいへん苦労している」という記事を目にした家族から猛反対にあい、最終的に校長になる夢を断念。その後、あるメーカーに転職し、機械のオペレーターとして60歳の定年まで勤務した。職探しを始めた定年後の赤津さんの目に留まったのが(株)シニア東海の募集広告で、早速同社に応募、(株)シニア東海から(株)三ツ輪機械製作所への派遣が決まった。

赤津さんは「何事もトコトン極めないと納得できない性格です。ですから、いわれた仕事をこなすだけでは物足りないので、派遣先の了解はいただきましたが、より効率よく仕事を進めるために、会社の工作機械のプログラムも徹底的に書き直しました。ずいぶん仕事がやりやすくなったはずですよ」と話す。30年来の趣味のゴルフの腕前はハンデ4、ひとに勧められて1年前から始めたボーリングはアベレージ185と、赤津さんが並はずれた成績を残しているのも、そうした性格を物語っているといえるだろう。

赤津さんの仕事に対する姿勢を(株)三ツ輪機械製作所としても高く評価しており、同社の宇佐美社長は「赤津さんがかつて在籍していた会社は、当社と縁がある仕事を手がけているのでよく知っています。このため、赤津さんがこれまで身に付けてきた技術が本物だということわかります。ですから『現場では好きなように仕事をしてもらって構わない』とお話しています。実際、赤津さんの技量は当社の社員も一目を置いています。こういう人には年齢にかかわらず働いてほしいと思っています」と話す。



赤津さんの仕事は「若手の教科書」の役割を果たしている

宇佐美社長の言葉に対して赤津さんは「現場の人のなかには、私のような世代がいると仕事がいやらしく思う人もきっといるでしょう。しかし、最終的には現場で手が動くかどうかは問題ではないかと思えます。つまり、町工場では口ばかりで手が動かない人は生き残れないからです。何歳までとはいえませんが、現場で手が動くうちは働いていきたいですね」と一層引き締まった表情を見せる。ゴルフやボーリングの腕前を引き合いに出すまでもなく、赤津さんの仕事に対するスタンスは生涯現役の道に通じているといえるのではないだろうか。



宇佐美男社長(左)と赤津光伸さん